

# 三好正巳著『産業労働論序説 ——生産システムと労働——』

(法律文化社, 1993年)

仲村政文

(1)

われわれは今日、生産力体系の大きな変革期に直面している。いわゆる“コンピュータ革命”(情報革命)の進展により、生産過程、流通過程、生活過程が同時的・複合的に変革の波をかぶっているのである。もちろん、この変革の核心はME革命による生産過程の変革にはかならないのであるが、同時に情報(処理)過程のシステム化・ネットワーク化に対応して、諸過程のシステム化・ネットワーク化がすすみつつある点で特徴的である。

われわれは今日の生産力体系の変革を歴史的文脈において把握しなければならない。それは研究開発の達成を技術的基礎としていることはいうまでもないが、同時に、資本主義の「構造的危機」と密接に関連しながら進行しているという点が特別に強調されるべきである。この「構造的危機」のもとで、今日の「新しい型」の技術革新はシュムペーターのいう「創造的破壊」を推し進める要因のひとつとなっているのである(資本主義的合理化)。ここでは超過利潤の取得が最大の狙いであることは敷衍するまでもないことである。

いずれにせよ、こうした新しい状況に直面して、多くの研究者が調査・研究に取り組んできた。しかしながら、その成果は必ずしも満足できるものではない(もちろん、この間、多くの優れた実態調査レポートが公刊されたことは改めて指摘するまでもないことである)。このようになるのも、第一に、客観的過程が未成熟であったからである。社会科学は歴史科学にはかならないのであり、調査・研究の対象が“新しい現象”であるばあい、その現象は一定の時間的経過において成熟していなければならないのである。第二に、方法論もまた未成熟であったからである。

このような研究状況のなかで、注目すべき労作が刊行された。本書がそれである。まず、本書の編別構成をみると、次のとおりである。

## I 産業労働論の課題と方法

- 1章 産業労働論の成立
- 2章 産業労働論の課題と分析方法
- 3章 産業労働論の構成

## II 産業労働論の基礎理論

- 1章 社会的生産の発展と産業の展開
- 2章 資本の蓄積と産業労働
- 3章 ブルジョア社会と産業労働

## III 生産システムと産業労働

- 1章 相対的剰余価値生産の発展と生産方法の変化

## 2章 生産方法の変化とシステム産業的分業

## 3章 生産システム化と労働様式

あとがき

一見して明らかなように、ここでは理論と現状分析とが統一的に展開されている。以下、編別構成に即して論評するが、全編にわたる必要もないと考えるので、中心的な論点に限定する。

まず第I編では、冒頭において産業労働論を設定することの「必要性」が問われ、「産業の発展にともなう現在の巨大な社会的生産が、労働の生産力の発展によってもたらされたものであるという認識から、人間労働の社会的生産力としての発展を理論的に、したがって経済学的に解明する必要があると判断されるから」（P. 3）とする結論が直截に提示される。産業労働は「製造工業を表象してとらえられた」産業資本に包摂された労働にはかならないのであるが、この産業労働が重要な意味をもつのは、次のような諸関連に位置しているからである。ひとつには、諸産業は産業資本を「起点」として展開するからであり（産業資本の循環定式における商品資本＝商品取扱資本、貨幣資本＝貨幣取扱資本の展開をみよ）、ふたつには、産業労働は剰余価値を生み出す労働であるからである。

著者の上のような主張はそれ自体として十分に説得力をもっている。ただし、著者のいう「産業の展開」は個別資本（ないし資本一般というべきもの）の循環定式から演繹的に捉えるのではなく、社会的分業の展開とみるべきではないのか。このようにいうのも、著者にとっては、史的唯物論を意識している——明示的ではないが——と思われるからである。周知のように、マルクスにおいては、労働は即自的に「人間と自然とのあいだの一過程」（「物質代謝」の過程）であり、したがって、生産力も労働の生産力にはかならないとされ、それ故にこそまた、この労働は価値（剰余価値）形成力をもつとされる。このようにみえてくると、産業労働論は、労働一般との区別や農業労働との範疇的な区別の問題もふくめて、史的唯物論に即した吟味が理論的な前提になるのではないか。以下にみる労働方法、生産方法、生産様式などの諸概念を検討するにあたって、この吟味が一つの前提になるといえよう。

いずれにせよ、読み進んでいくと著者の課題意識が明示されている叙述に辿りつく（P. 10）。著者にとっては、産業労働は資本の蓄積過程における「労働の社会的生産力およびその発展の問題として解かれなければならない」のであるから、「労働過程における労働の社会的結合の進展」の問題が、さらにいえば、「資本主義の生産様式と調和できなくなる生産手段の集中と労働の社会化の進展」の問題が「解かるべき課題」となる。したがって、産業労働論は「資本主義の生産関係を克服する契機」と「主体の成熟」にいたる過程を明らかにする「基盤」となる分析として位置づけられる（この課題の「内容」については [P. 30] 参照のこと）。

評者はここに著者の基本的立場（視点）が集約されているとみるのであるが、穿ちすぎであろうか。労働分析においては、労働主体と階級主体の人格的な統一のうちに議論をすすめるべきであるとするのが評者の基本的見地であるので、著者の見解を我田引水的に理解しているのではないかと畏れているのだが。しかしながら、この「課題」について——とりわけ「主体の成熟」という点にかかわって——一言すれば、「労働の疎外」という根本問題が看過されてはならないのではなかろうか。

（ 2 ）

著者は、生産組織を分析の対象とするという観点から、生産様式、生産方法、労働様式、労働方法などの概念および相互の関連を明らかにしている（[P. 13] 以下）。著者によれば、生産様式は「資本主義の生産様式に規定された生産方法」（P. 15）であり、その基礎にあるのは生産方法である。そして、この生産方法は二つの要因、すなわち、労働手段および「結合労働による生産力として生産様式に固有の結合の形態をな

す」(P. 24) ところの労働方法によって規定される。さらに、労働様式は労働主体の側面から捉えられた生産様式である。

ここに明らかなように、〈生産様式(労働様式)〉〈生産方法〉〈労働方法〉が階層性において措定されている。また、「労働の技術的諸過程および社会的諸編成」(P. 215) という表現もみられる。評者は生産様式の内実(規定的なもの)としてはこの二つの要因(労働の技術的諸過程, 労働の社会的諸編成)で十分であると考えている。さらにいえば、生産様式範疇と別に〈生産方法〉という範疇を定立する必要はないのではないか。このような立場から評者は、「生産様式とは、生産主体が特殊歴史的な労働編成(より広くは協働関係)と所有形態とにおいて労働手段の社会的体系に関連する(働きかける)方法=形態のことであり」と述べておいたことがある。そして、生産様式(方法)の基本的モメントは上の二要因とほぼ同じとみなされるところの労働手段(の社会的体系)という要因および労働の社会的編成という要因である。

このように基礎的な範疇を明示したうえで、著者は産業労働論の「基礎理論」を展開する。まず、生産の社会的性格や生産一般の抽象性に触れ、生産、分配、交換、消費の同一性と生産の規定性(分配以下を規定するということ)を明らかにする。そして、産業とは「(特殊な)生産部門ないし生産部面のもとの特殊な生産、あるいは一つの生産の総体」(P. 44) であるとする規定が提示される。この規定は、生産、分配、交換、消費の関係性に視点を据えて導き出されたものであり、その点において独自の規定であるといえよう。

このような視点の導入は積極的な意義をもつことはいままでもない。だが、人間=自然関係に視点をすえて使用価値の側面から定義することも一つの方法ではなからうか。人間=自然関係の原基的形態としての農業的生産から工業が分離し——商業を随伴しながら——、〈農—工—商〉という骨格が形成される。この過程はアダム・スミスによって自然的行程(natural course)と呼ばれたものであるが、いずれにせよ、この基幹産業を基礎として産業の階層構造が成立する。このばあい、自然との関係(使用価値生産)において本源的なものと特殊歴史的なもの(例えば、金融・保険業など)との範疇的な区別もひとつの積極的な意義を有することになろう。

ともあれ、著者は生産活動と産業の問題に論じたうえで、資本の蓄積と労働の生産力、賃金、労働需要などとの基本的な関係を整理する。さらに資本の循環定式に即して、産業労働を論じて一つの締め括りをおこなっている。このことを前提として、改めて労働の一般性とその定在形態を明らかにし、〈マニファクチュア〉→〈機械と大工業〉→〈「もう一つの階梯」=現代資本主義の生産様式〉というように、生産様式の段階区分(階梯)が示される。このばあい、現代資本主義の生産様式の規定的なモメントはメカトロニクス機器とシステム産業であり、そのメルクマールはCNC工作機械の出現である。そして、このCNC工作機械の出現が決定的な意味をもつのは、それは機械系から自立した制御系(制御機構)を内包しているからである。ここで現代資本主義の生産様式をオートメーションとしていないのは、今日の生産力体系の基本的特質を〈システム化〉のなかにみいだしているからであると思われる。いずれにせよ、労働手段の発展段階の区分(画期)に関するこのような理解は通説とも一致している。

問題はこれから先にある。われわれにとって極めて重要な理論的課題がここに伏在しているのである。すなわち、労働手段に規定されるところの資本による労働の包摂の形態をどのようにみるか、また、その労働の価値形成をどのように理解するかという問題がある。このことに関連して著者は次のようにいう。資本主義的生産様式の〈階梯差〉は「労働が、資本に包摂される実態によって、形態的包摂、実質的包摂、そこからの離脱の開始、労働の二重性にかかわり価値概念のゆらぎを起す労働様式として区別される」(P. 155) と。

ここには二つの重要な論点が含まれている。ひとつは資本による労働の包摂の形態は機械段階とは異なるということである(実質的包摂からの「離脱の開始」)。「機械段階とは異なる」のは、著者によれば、生産方法がシステム生産であり、「工場を基盤とした大工業の範囲をこえて」産業のネットワーク化が実現するからである。そして、工場現場の「主たる労働」は情報労働としての「プログラムを作成する労働」=情報

労働にはかならない（P. 240）のであるから、労働過程を資本が「直接に支配する」ことに「技術的な制約」があることになる（P. 302）。この論理は著者によって明示的に展開されていないので、評者が敷衍したものであるが、いずれにせよ、このような見地にたつとすれば、資本による労働の実質的包摂は〈個別資本〉による〈直接的労働〉の包摂に限定されることになる。この点は評者も受容することができる。問題は、かかる実質的包摂からの「離脱」の物質的条件である。

われわれがここで改めて想起する必要があるのは、〈マニュファクチュア〉から〈機械と大工業〉への移行において、資本による労働の包摂は形態的包摂から実質的包摂へと転回するという歴史的過程の含意である。この過程における要点は、労働主体と労働手段との連関構造の変化である。すなわち、労働手段が道具から機械へと発達を遂げるなかで、〈労働主体—労働手段〉の連関は根本的に変化するが、このことに媒介されて、資本による労働の包摂は実質的なものになるのである。

その論理はこうである。〈マニュファクチュア〉にあっては、労働主体の技術的な編成（熟練労働を中心とする等級制的編成）＝マニュファクチュアの分業を軸として特殊化した多様な労働手段が配置される。他方、〈機械と大工業〉ではそれ自身「熟練をもつ」と比喩されるところの機械の体系を軸として労働力の配置（不熟練労働を中心とする編成）がおこなわれる。かかる転回は、労働手段の資本主義的所有（労働主体の労働手段〔生産手段〕からの分離＝労働疎外）のもとにおいて生起するのであるから資本による労働の包摂が完成することになる（形態的包摂から実質的包摂へ）。ここでは「転倒」が生じているのであるが、それは二重である。ひとつは、労働主体と労働手段の連関構造が根本的に変わるということであり、もうひとつは、労働がより一層社会的になるということである。もちろん、自己労働にもとづく所有にあっては、かかる「転倒」は生じない。

いずれにせよ、この「転倒」は労働の生産力の「資本の生産力」への転化の論理と完全に重なりあっているという点が看過されてはならない。さらにいえば、ここでの論点は「生産主体が特殊歴史的な労働編成（より広くは協働関係）と所有形態とにおいて労働手段の社会的体系に関連する（働きかける）方法＝形態のことであり」とするさきの生産様式概念とも連なっている。このような転化の過程を念頭におきながら、〈機械と大工業〉から区別される「新しい階梯」を析出し措定するばあい、〈マニュファクチュア〉から〈機械と大工業〉への転化の論理が改めて参照される必要がある。というのは、前述の問題とは別に、次のような問題がここにみいだされるからである。すなわち、〈機械と大工業〉への転化は同時に資本主義化の急激な進展の物質的基礎をなしたのであり（したがって、革命的意義を有する）、「新しい階梯」はこれに比肩しうる生産関係の変化を現実にもたらしているのか否かという重要な論点がここに内在しているからである。

（ 3 ）

ところで、もうひとつの論点、すなわち「価値概念のゆらぎ」という論点の開示も積極的な意義を有する。

さきに資本による労働の包摂に関連して、資本が労働過程を「直接に支配すること」に技術的な「制約」があるとする著者の見解にふれたが、著者はさらにこの論点を敷衍して、次のようにいう。「最終生産物に対して情報労働の有用性が希釈化されるということは、有用労働として投下される労働時間によって価値を秤量することを困難にする」（P. 303）と。

著者によれば——すでにふれたように——、「主な労働」は情報労働にはかならないのであるが、その情報労働の特殊性のゆえに、「有用性が希釈化」し、投下労働量（労働時間）による価値の秤量が「困難」になるというのである。そして、この「困難」は、別の箇所において、「生産過程における各プロセスの流れが自動化されること」に起因するとされ、その理由は次のように敷衍されている。「労働者の、また、自動装置のオペレーターの労働が、生産の各プロセスに直接配分されるものでないこと、機械系に対し制御系の

働きかけが、情報系によってなされることから、労働の生産過程への関与が間接的になるからである。……こうして、労働時間は、労働の自動化とともに、全体としての価値生産、価値増殖に関連しながら、価値量には間接的にしか関連しない。」(P. 308)

ここでの論点に関連して、想起されるのは、マルクスの次の叙述である。すなわち、「大工業が発展すればするほど、現実的富の創造は、労働時間と充用された労働の量とに依存するよりも、むしろ労働時間中に動員される諸作用因の力に依存するようになる。そしてこれらの作用因はそれ自身ふたび……それらの生産に要する直接的労働時間に比例しないで、むしろ科学の一般的状態と技術学の進歩、またはこの科学の生産への応用に依存する」(『経済学批判要綱』)と。ここでいわれていることは、機械の導入がすすむなかで(「大工業が発展すればするほど」)、「機械の生産性」の急激な増大がすすみ、「充用された労働時間とその生産物との間のはなはだしい不比例」という事態が生じるということである。かかる事態の進行は、「価値に立脚する生産」の「崩壊」にも繋がることをマルクスは示唆している。

もちろん、マルクスの示唆するところと著者のいう「価値概念のゆらぎ」とは局面を異にしている。マルクスは個別生産過程に視点を据えているのにたいして、著者は「システム産業的分業」における情報労働の位置の特殊性(「各プロセスに直接に配分されるものではない」)に注目しているのである。かかる相違を認めるとしても、後者の問題はマルクスの立論の応用問題として解くことができるのではないか。情報労働の特殊性もマルクスがここでいう「科学の一般的状態と技術学の進歩」「科学の生産への応用」という問題にかかわっているものであり、したがって、この問題は精神的労働(一般的労働)の生産力形成と価値形成の特殊性の問題にほかならないということもできよう。

マルクスはまた、生産力の発展は「究極的にはつねに、活動させられる労働の社会的性格に、社会内部における分業に、精神的労働の発展、とくに自然科学の発展に、帰着する」(『資本論』)とのべている。われわれはこの一文の含意を「システムの産業分業」をも視野にいれて敷衍することによって、今日の労働の生産力形成の性格と価値形成の特殊性とを解明する基本的な手がかりをみいだせるのではないか。さらにいえば、今日、科学の「生産力化」が急展開するなかで、科学的労働、技術的労働、直接的労働の階層的な編成と各々の価値形成力の相違とを具体的に吟味することによって、著者のいう「価値概念のゆらぎ」の問題も解くことができるのではないか。この問題の解明についてはいくつかのアポリアがあるが、本書においてひとつの筋道と独自な見解が提示されたことの意義は大きい。専門を同じくする研究者たちの真摯な検討を期待したい。

以上の根本問題に留まらず著者は、生産過程の変容にともなう産業労働の問題として、生産管理、作業組織(労働者間の協働関係の希薄化の問題)、労働制度(労働力の流動、労務管理、労働政策)、労働基準などの諸問題を論じ、最後に労働組合の「役割」「任務」の問題にふれて本書を締めくくっている。ここで少しだけ欲をいえば、この「締めくくり」からもう一歩すすんで、さきにもふれた「主体の成熟」にいたる「基盤」に關説して欲しかった。

いずれにせよ、本書では産業労働にかかわる問題が体系的に展開され、資本の蓄積と労働の社会化、およびその矛盾の構造に視点が据えられている。そして、現実的諸過程が詳細に分析されているが、論述は一般的・本質的なものから具体的・現象的なものへと——『資本論』の理論的叙述が縦横に参照されつつ——展開されている。豊かな内容をもっているので、多くの研究者による検討が望まれる。